

容されたが、その時の日本人の親切さは生涯忘れ得ない。今は立場が変わったが、そのご恩返しをするときだと、私なりに努力している」と、優しい微笑を浮かべ親切にしてくれたサマトフじいさん。

もう一人は、帰国列車の輸送指揮官、各收容所からの寄り集まりの日本兵、その行儀の悪さに見かねて、各車両の世話役を集め、「皆さんにお願いしたい、私はこの度スターリンから、皆さんの帰国列車の輸送指揮官を仰せつかった時、無上の光栄に思いました。私は幼いときから両親に、世界一優秀な民族は日本民族であると教えられた。士官学校でも教官から、世界を制覇出来るものは日本民族であると教育を受けた、その優秀な日本民族の中で、最も優れた関東軍の精鋭を輸送する指揮官を拜命し、そのすばらしさを学ぼうと喜んだのに、何たるあわれな姿でしょう。私はこのような姿を見るために、輸送指揮官を引き受けたではありません。父と母が教えてくれた世界一優秀な民族、日本民族の素晴らしさを見せて下さい。日本にいる父と母はその姿を待っているでしょう。お願いします。」と、片言まじりの日本語で、

涙を流して忠告してくれた三十五歳のゲベウの中尉の姿を忘れることはできません。

二十二年七月二十五日舞鶴に上陸、二十七日我が家に帰り着きましたが、残念ながらこの郵便局にも復職できませんでした。郵便局に籍を残して入隊した仲間たちは、退職後も国の恩恵を受けて悠々たる生活です。

戦争はまさに悲劇であります。人間の幸福を奪い、生地獄に送り、家庭を貧困のどん底に叩き落とし、人間の根性まで腐敗させます。国境を越え美しい人類愛とともに、五円の送金にこめた母子のきずな、戦争の悲劇は、家訓として子々孫々に至るまで残します。

北千島の占守島に戦う

山口県 松 永 幸 助

民間、軍隊を通じて四年間お世話になった満州を去り、釜山を経由して博多に着いた。吉塚駅から汽車に乗り小郡駅に停車したので、鎧戸を押し上げて懐かしいプラッ

トホームを見渡した。山の向こうは生まれ故郷の平川である。また今日はちょうど二月二十八日、平川の荒神様のお祭りの日だ。オーイと叫びたくなった。

朝食受領の責任者であった私は、徳山駅でホームに飛び降り、紙片に母の住所氏名と「影膳に 匂いかぎたり 山向こう」と書いて国防婦人会の一人に送ってくれるよう頼んだが、その人は暫く考えてから「できません」と断わられた。

車内では、どこへ行くのかいろいろの話が出た。結局、北海道まで行ってしまい、小樽で下車し宿舎に入った。ここまで来て、ようやく我々は北方の島へ行くことが予想された。

一か月過ぎて乗船し、青森県の大湊に寄って太平洋に船出した。大変な時化で甲板のドラム缶はゴロゴロするし、対潜監視のため甲板に出ても、護衛の駆逐艦が大波のため見えたり隠れたりした。三日間航海して島に着き、完全武装したまま、縄梯子から大発に移乗し、島に上陸した。

この島は千島列島のうち、北から三番目の温祢古丹(オ

ンネコタン)島で、船舶工兵の一個中隊が駐屯しているだけであった。この島には二か月いたが、逐次、焼玉エンジンジンの船でカムチャッカ半島とは二二〇の距離の、千島の最北端占守島へ移動していった。

占守島は年間霧が深く、夜間廁へ行って迷って行方不明になるものが出るほどで、兵隊はいつも外被を着用して行動していた。冬は日照時間が短く、夏は白夜で大変長かった。海流の関係か満州ほど寒くは感じなかったが、夏も冬服で過ごした。島はツンドラで高山植物の花が咲き、またガンコウランの実がなり、雷鳥も住みついており、その下は亜炭があった。島の半分以上は榛(ハン)の木と五葉の這松があり、燃料として非常に役に立った。雪は大変多く遅い春が来ると、鰯が海岸に押し寄せ砂浜では一突きで四、五匹も取れるほどであった。また鱈が年中釣れ、春遅く鮭、鱒が川に上ってきた。戦争のため漁を止めて四、五年になるので、魚は水のない所まで押し寄せて、押し合いへし合いで出られず、死んだものもあるなど信じられないようなことであった。

米空軍機の空襲は絶えずあり、ノースアメリカン(双

発)とコンソリデーデットB 24(四発)であった。我が空軍機が迎撃して撃墜したこともあったが、反対に輸送船が撃沈されることもあった。また海岸では艦砲射撃を何回も受けた。その間部隊は洞穴掘りやトーチカ構築など土木作業に明け暮れた。

当時、私は軍曹で分隊長を命じられていた。無線交信で知った広島島の原爆のことも部下に話してやった。八月十五日になって無線の兵隊がヒソヒソと話していたが、我々を見ると話をやめた。翌十六日各所の小隊は中隊に集合を命じられ、中隊長より終戦の詔勅を聞かされた。

長期戦を想定して保管されていた新品の軍服を兵隊は着用し、食料も十分支給され小樽で受けた三八式歩兵銃に代わる九九式小銃も役立たずと思われた。

しかし、八月十八日の早朝になって、突然ソ連兵が島の北端、国端岬付近に上陸してきた。我々は山の上にある中隊に呼ばれ、ソ連軍と戦闘を交えるため出動を命ぜられた。急速武装して中隊から二個小隊編成され、小針工兵隊へ行った。そこには我々と同じころ満州から移動してきた戦車第十一連隊の戦車がきており、我々はそれ

に乗ることになっていた。戦車一両に一個分隊が乗り島を北上した。

島内の道路網はよく整備されていて振動も少なく乗り心地は良かった。二時間ぐらい走った所で我々歩兵は降ろされた。部下に実弾を装填させて横一列になって丘に上るよう命令していたが、後ろの方を振り返ると、私のあとに縦一列になってついてきているので、危険を感じてあわてた。

戦車は五両きており、歩兵も二個分隊いた。霧が晴れた時、後方を振り返ってみると、谷を隔てた向こうの丘の先刻きた坂の上で、味方のトラックがソ連軍に爆破されるのが見えた。次の車もまた、やられた。私は大声で戦車に連絡したところ、戦車はクルリと砲塔の向きを変え、一斉に射撃の開始したが、再び霧が出て見えなくなつた。霧が晴れるとソ連軍が多勢いるのがよく見えた。霧の晴れ間に、戦車も我々も射撃を開始した。

しかし霧のため視界がきかず、退路を断たれているように思われ不安であった。中隊長を探して前進していると、ソ連軍に狙撃されるようになった。そこで我々は夕

コッポを掘ることにした。暫くして、敵から迫撃砲を五〇発ぐらい撃ち込まれたが、全員無事であった。

午後になり、我々は戦車とともに西海岸を警戒しながら北上した。敵味方どちらが撃っているのか分からぬが、海上では砲弾が水柱を上げていた。夜に入り四嶺山の頂上より一〇〇呎ぐらいの所で朝を迎えた。上空に飛行機の爆音がしたのでよく見るとアメリカの四発である。ソ連軍の陣地から歓声があがるのが聞こえた。

その時、兵隊が「分隊長、捕虜が来ました」と叫んだので、私は立ち上がって出て見ると、セーラー服を着たソ連兵がこちらに歩いてくるのが見えた。一〇呎ぐらい前方には、味方の戦死した兵隊の遺体を載せたりヤカーが置いてあったのであるが、それをはねのけて英語で道をあげると言った。私が近寄ると手榴弾の安全ピンを口で抜いた。私が相手の腕をつかまえるとマンドリン（ソ連の連発銃）を上に向けてクルリと向きをかえて帰っていった。

後方より我が軍の将校が来て「後ろを後ろ、終戦だ」と言ったので後方を見ると、戦車が白い旗を掲げていた。

先刻のソ連兵が今度は私のように剣付鉄砲を持って来た。将校が背を見せて、案内の素振りをすると直ぐ帰って行った。

将校が五人集まった時、前方の山より四角に並んだ白旗を持ったソ連兵が一〇人ぐらい来た。味方の将校が私に敬礼するように言ったので、指示通りに敬礼したら、先方も敬礼を返した。交渉が始まったが、指令部から来るのを待てというようであったが、よく通じないまま相手と分かれた。散発的であった撃ち合いもなくなっており、私たちは最前線にいることに不安を感じたので、戦車のいる位置まで後退した。

この三日間の戦闘中、補給は万全で食糧等も直ぐ近くまでトラックで運んできてくれた。

島の南端にある中隊に帰る途中、最初に戦闘した所に二〇人ばかりのソ連兵の死体があった。中隊に帰ってみると、留守番二人を残して中隊全員が出動していた。私たちは全員戦死したということになっていた。

後で聞いたところでは、この短期間の局地戦で戦死者ソ連三〇〇〇人、日本六〇〇〇人というほどの激戦で、日

本軍の勝利であった。

八月二十一日、三好野飛行場へ武器を並べて、ノモンハン以来勝つたことのないソ連に勝つた我々は、敗れたソ連の軍門に降るといふ情けない仕儀になってしまったのである。

軍は解散され一〇〇〇人単位で作業大隊となり、十一月シベリアに移送された。それからは飢えと寒さと重労働との戦いであった。

戦いすんで

山口県 富永繁久

ハワイの真珠湾を攻撃して以来各海戦に参加、赫々たる武功を残し全く無傷だった「瑞鶴」は、幻の航空母艦とか鬼神の航空母艦などともいわれて、敵には恐怖感を与え、また友軍の間では羨望の的ともなっていた母艦ではあった。しかし、昭和十九年六月十九日のマリアナ沖海戦で、敵空軍による至近弾数発を受けて艦は小破、兵

員も四〇数人の犠牲者を出した。その後「瑞鶴」は呉のドックに入って修理、それまで日本が各国におくれをとっていた電波探信機を搭載し、やがておとずれるレイテ沖海戦に備え僚艦とともに大分県の別府沖で航空戦の訓練に励んでいた。

そのころのことであつたと思う。飛行甲板をひとり私 が歩いていると、向こうからいかめしく正服を着用した士官が静かに歩いてくるのが見えた。私はその士官の数歩前まで近づくと立ち止まって拳手の礼をとつた。するとその士官は鷹揚に右手をあげて答礼をした。私はその時その士官が誰であつたか知る由もなかつたが、後になつてその士官が先年逝去された高松宮殿下であり、殿下はその時「瑞鶴」に搭載された電波探信機見学のため乗艦されていたということを聞いた。

閑話はさておいて、航空訓練もいよいよ熟したころわが「瑞鶴」から戦闘には不要な物品が次々と陸揚げされ、かわりに木材や浮遊物などが積み込まれているのを目撃した。私は出撃の日が真近に迫つたことを知り、我々もいよいよ海の特攻隊になる日がきたのだと思つた。